

■エルザはショタの催眠肉便器

——とある館。“妖精の尻尾”の女魔導師エルザは、この館でメイドとなっていた。

無論ただの趣味ではなく、依頼を受けているためである。

依頼主は館の主人。一週間ほど留守にするため、その間 館の面倒……家事等を頼みたい、とのことだ。

それだけなら家政婦を雇えばいいのだが……依頼主には魔法習得を目指す一人息子がおり、魔法訓練も見て欲しいため魔導師に依頼していた。

たまたま手が空いていたエルザが引き受け、現在 依頼が始まったところである

【まさかエルザさんに受けていただけるとは。これなら安心ですね。では、館と息子を頼みます】

「ああ、任せておけ」

評価の高いS級魔導師が来たとあり、安心して館を去る依頼主。これで館にはエルザ、依頼主の息子である少年の二人のみとなった。

「では私は掃除をしておこう。魔法訓練が始まったら呼んでくれ」

【はいい♪】

真面目な印象を放つ依頼主と違い、無邪気……というより軽薄そうに見える少年。高名で美人なエルザが来たことで浮き立っているのだろうか。

なんであれ、依頼となれば完璧にこなすのが道理。呼び出されるまで、エルザは慎重かつ素早く骨董品を磨いていく。

（なかなか広いな。まあ私にかかれば一日で済むが）

次々とツボや皿を磨くエルザ。次に棚の上の骨董を取ろうとした時……

【あ、エルザさん。やってますねー。……………おっと！】

部屋から出ていた少年。彼はおもむろに近付くと、手を伸ばすエルザの腰に触れようとしてきた。

「……何をしている？」

不意打ちのお触りを難なく避け、エルザは少年を睨み付ける。

【い、いやー、バランス崩れたように見えたから、支えようかと……無事ならいいんです！】

エルザの眼光が効いたか、少年はすぐに引込んでいった。

（……まさか、いきなりセクハラをしてくるとはな。大したマセガキだ）

依頼主の息子となれば逆らえない……とでも思ったのだろうか。それとも絶世の、と付けていいエルザの美貌に魔が差したのか。

流石に凄んで威嚇すれば引き下がるが、小さいとはいえ男。油断せぬよう自分に言い聞かせ、エルザは掃除を再開する。

◆

数分後。エルザは少年に呼び出され、彼の部屋で魔法訓練に付き合うことになった。

「……ほう、催眠魔法か」

【うん。精神操作系の魔法は、上手く使えば敵を無傷で制圧できるし、被害者や市民にも安全と安心を与えられるから……】

「ほう？ 随分と殊勝なことだ。……悪事にも役立ちそうだがな」

【そ、それは他の魔法も同じだよ！ 確かにイメージは悪いけど……】

「もっともだが……で、私が実験体になればいいのか？」

【あ、うん。……ダメかな……？】

「別に構わん。ただ、先に言っておく。お前ごときの魔法、私には効かんぞ」

【じゃあ、エルザさんにも効く魔法を習得できたら一人前ってことだよな！】

激戦を経験したエルザは、大抵の魔法に耐性がある。特に魔力が弱ければほぼ通用しない。

だが少年はそれを知って、より意欲が増したようだ。早速 怪しい手付きとなって催眠術をかけようとするが……

【エルザさん、あなたはこの手を見ているとだんだん眠くなる……意識が薄れ、全身から力が抜けていく……】

「……………」

【意識がだんだんと薄れていき……】

「……もういいか？ しかし、私の意識を奪ってどうするつもりだ？」

【あ、あはは……】

少年の努力も空しく、やはりエルザには全く通用しない。そもそも魔力を感じないため、一般人にも通じないだろう。

「まあ、焦ることはない。少しずつ上達すればいい」

【ですね】

暗示ではなくの諦めの意か、少年は手を打って パンッ！ と乾いた音を響かせる。

同時に悔しさからか、エルザには聞こえない小声で何かを呟いた……

——意識が薄れ、身体の力が抜けて暗示に素直になる——

◆

……無警戒に棒立ちとなったエルザ。眼は焦点が合っておらず、少年が眼前で手を動かしても一切反応しない。

【やっとかかった。流石はエルザさんだなあー】

時間をかけることで勘付かれずに催眠状態に陥らせる魔法。

それが成功し、無警戒・無抵抗となったエルザを前にして、少年は下卑た笑みを浮かべる。そして口早に様々な暗示をかけていく。

“常に性感と性欲が発情時と同等にまで高まる”

“手を叩くたびに性感と性欲が上昇する”

“触られたり触ったり、チンポや精液を見たり触ったりするたびに性格・性欲上昇”

“催眠にはかかってないと強がる”

“許可するまで攻撃できず、館からも出られず、依頼の放棄もできない。矛盾が生じても都合よく解釈して依頼を続行しようとする”

“本来の仕事に必要な動きがかなり遅くなる”

“暗示に対し、意志力で多少は抵抗可能。ただし決して解除はできない”

“子宮や受精、中出しで感じるようになる”

“気持ちよくなった時、大声で喘ぐようになる。特にイッた時は素直になり、『あへ』『おほ』などの無様な淫語を発するようになる”

“この暗示は忘れる”

様々な暗示を聞かせた後、少年は再び強く手を叩いた。

◆

——パンッ！

「っ！」

エルザは音に対し、何故か過敏に——まるで一瞬、眠っていたかのように——反応していた。

【？ どうしたの？】

「いや、なんでもない。では掃除を再開するとして。また用があれば呼んでくれ」

（あまりに退屈で眠くなっていたか……？）

ここ最近では依頼続きで忙しく、流石のエルザといえど疲労が溜まっているのかもしれない。気を引き締め直し、再び掃除を続けていく。

【おおー、そんな重たいツボも持てるんだ。流石はエルザさん！】

巨大な骨董品を磨いていたエルザ。それを通りがかりに見た少年が、エルザの腕力に感心してか拍手をしだした。

「何だ、大袈裟な。……っ？！」

その時である。エルザの中に、熱い疼きのようなものが発生した。

（な、何だこれは？ 身体が、昂ぶって……!）

「おっ♥ ん……っ♥」

更に、否応なく喘ぎが漏れる。疼きは強いものの、耐えられない程でもない。にも関わらず、だ。

【あれ、エルザさんどうしたのー？】

明らかな異変に、エルザはすぐさま異変の原因と思しき少年を睨む。

「お、お前……っ♥ 一体、何を……んっ♥」

【なんのこと？ ほら、がんばれががんばれ♪】

悪戯な笑みを返す少年。彼が何か仕組んだのは間違いない。だがその仕組みが判らなければ意味がない。

（まさか、こいつの催眠に……？ いや、催眠など存在しない……では一体……）

強い精神力で声を抑える間にも、少年が手を叩き、そのたびに疼き——性感と性欲がどんどん強くなっていく。

ついに抑えきれない域にまで達し——

（なぜだ、なぜこんな……だ、ダメだ……♥）

「んんんんっ♥♥」

快感に身体が打ち震え、強く痙攣。ツボを持ち続けるなどとても出来ず、とうとう落下させてしまう。パリンという音と共に破片が飛び散った。

【あーあ……ホントに割っちゃった。エルザさんどうしてくれるの？】

「ま、待て……！ 今のは……お前が、何か仕掛けただろう！」

【なんのことー？】

「とぼけるな！ お前が手を叩いた時……」

【でも証拠はないよね？ こっちからしたら、いきなりエルザさんが喘ぎだしたんだけど……盛ってるの？】

「っ！ だからそれは……」

【とりあえず、手続きしてもらおうからね】

また少年が手を叩くとなぜか抗えず、別室に案内される。そこで見せられたのは、一枚の契約書であった。

「何だこれは…… 『肉便器契約書』だ？」

その内容は、サインした者に家事の世話、そして少年の思う通りの肉奉仕を強いるというものだ。
まともなものではないため法的な効力は発揮されないだろうが、こんなものにサインなどできるはずがない。

「お前……！ やはり最初から私を」

—— パンッ！

【普通の弁償用の契約書に見える】

「……………」

【ほら、ちゃんとサインしてよ】

「……ああ、すまない……………」

—— パンッ！

また手を叩く音が聞こえ、エルザは我に返る。

【うわ、ホントにサインしてくれたんだ。エルザさんてドMの淫乱なんだね】

「？ ……………っ！ な、これはっ……！ お前、今度は何をした！？」

【……気付かない？ エルザさん、催眠魔法にかかっているんだよ】

「何を言っている？ お前の催眠魔法など、私に効くわけがなかろう！」

【じゃあ今までのことはどう説明するの？ 催眠にかかってないなら、特に理由なく喘いでツボ割ったことになるけど】

「……それは……そうだ、術式！ それを既に仕込んでいたのだろう？！」

自分に素人の催眠など効くはずがない。催眠以外で自分を意のままに操るとなれば、術式魔法を使ったと考えるのが妥当であろう。
やや強引な気がするものの、エルザはこの思考に納得して少年のやり口を指摘する。

「卑怯者め……！ 女魔導師が来たらこうすると、あらかじめ……」

【はいはい。いいからツボ割った罰を与えるよ。じゃあ早速だけど、これからはバニーガールの格好で働いてよ】

「くっ……ああ分かった。やればいいのだろう？！」

言われるがまま衣装をバニーガールに変更。

露出度が高くボディラインを目立たせるこの衣装はエルザのお気に入りだが、悪意がある少年の目を愉しませることになり不快感が沸く。

(術式であれば、なんとか解除できるはずだ。術式が書かれた場所さえ見つけられれば……)

【ほら早く掃除掃除っ！ ツボ割った分、ちゃんとがんばってねー♪】

—— パンパンッ！

「んひっ♥ わ、わかっているっ……♥」

やはり少年が手を叩くと抗えず、身体が火照っていく。

(は、早く術式を解かねば……！)

少年の狙いは、エルザを強制発情させて性行為に至ることだろう。このままでは本当に少年の思い通りになりかねない。
言うが儘なのは悔しいが、この状況を打開するためにエルザは急いで掃除を続ける——

——……

—————……………

(たかが屋敷一つの掃除と思っていたが……身体が、重い……！)

屋敷が広く、またエルザ自身の疲労もあるが……それにしては異様に動きが鈍くなっている。

(推測だが……おそらく、術式の影響で性欲や性感が数倍になっているのだろう。せ、性の快感が、これほどとは……♥)

性快楽のせいで動きが鈍っているのか、また別の要因があるのか……とにかく肉便器契約書に強制された通り仕事をこなしつつ、術式の形跡を探す。

【お、やってるねー】

「……暇なんだな」

【酷いなあ、せっかく心配してあげてるのに】

「必要ない。家事は私に任せておけばいい、だから……」

会話しながら、エルザは少年から少しずつ遠ざかる。少年はまずセクハラをするつもりだろう。

逃げられるとは思っていないが、僅かでも陵辱の時間を減らすために距離を取るが……

【またよろけてるよ？】

がしいっ♥

「はうっ♥」

いつの間にかエルザの後ろに回っていた少年。右の尻肉を驚掴みされ、一瞬にして発情したエルザは即座に嬌声を上げる。

(こ……高速移動……？ いや、これは……♥)

高速移動したかのように見えた少年。しかし実際は、煩悶としているせいでエルザの動きや思考の速度が鈍っていたのだ。
そのため少年の速度にもついていけず、戸惑い性感を我慢する間にも尻肉が揉みほぐされて新たな性感が送り付けられる。

「や、やめる♥ さわるなあっ♥ ま、またツボが……あっ♥」

【ほらほら、ちゃんとしないとまた割っちゃうよ〜？】

一思いに陵辱すればいいものを、一方的な状況ゆえにゲーム感覚で愉しむ少年。
しかし遊び半分のおもひにも耐えられず、快感が絶頂に近い領域に達する。

【ホラがんばらないと、また催眠に負けちゃうよ〜？】

「だ、だから……♥ これは術式か何かで♥ 私は催眠などに」

—— パンッ！

【お尻を揉まれるのが気持ちよすぎて半イキする】

もみもみもみもみいっ♥

「さっ♥ 催眠などっ♥ 通じないいいいいいっ♥♥」

皮肉にも少年による催眠暗示風の指示と同じタイミングで、軽くではあるが絶頂に至ってしまう。

甘い電流に痺れた両手が仕事をこなせるはずなく、またもツボが落下した。

「はひ……♥ お……お前え……っ♥」

【催眠セクハラに負けた上にまた器物破損した分際で偉そうにしないでよ。じゃ、罰ゲームを受けてもらおっかな〜】

“ツボを割った罰”と称し、今度はマッサージするように指示される。

（私を弄んでいるのか……なんという屈辱だ……♥ くっ、術式さえ見つかわねば……♥）

周囲に術式の痕跡がないか注意深く観察しながら、椅子に座る少年の肩や腕を揉む。

【あ〜、気持ちいいよ。その調子その調子♪】

—— パンパンパンパンッ！

「お、お前は調子に♥ 乗り過ぎだ……っ♥ み、耳障りだから♥ その拍手をやめろおお……♥」

【なんでそんなに拍手イヤなの？ あ、“手を叩くたびに性感と性欲が上昇する”催眠が効いてる？】

「催眠など効いては」

—— パンッ！

「いないいいいいいっ♥♥」

催眠になど、かかっていない。……はずだが、なぜか手拍子されると少年の言う通り、まるで催眠にかかっているかのように性感と性欲が増していく。

次第に性欲が思考を支配していき……少年のズボンがテントを張っているのを見ると、彼と交わりたいという欲求さえ生じてくる。

（落ち着け……♥ こんな下着に身体を許すわけには……♥ そ、そうだ……!）

服の上からでも分かる巨根。それに思わず生唾を飲むエルザは、あるアイディアを思いつく。

「こ……ここも、マッサージして欲しいんじゃ、ないか……？」

言うや、エルザはなんと少年の股間に手を伸ばす。

【お、いいね♪ そんなに性欲溜まってたんだ？】

「……違う……お前が、無理矢理に性欲を上げているんだろう……っ♥」

反論しながらペニスを露出させると、恐る恐る手で触れ……ゆっくりと手で扱う。

エルザのアイディアとは、手で扱う……いわゆる手コキで、少年を果てさせようというものだ。

前戯で射精させておけば、犯される心配はない。今は従順なフリをして、なんとか機嫌を取って隙を作るのだ。

（こ、これは、犯されないよう、仕方無く、だ……♥ け、決して、こいつのチンポに、触りたいわけではない……♥）

内心で言い訳しながら、少年の肉棒を愛で、凝視する。

（しかし……体格の割に、なんという大きさだ♥ 硬さや長さも……♥ それに♥ 匂いまで……♥）

改めて、つぶさに少年の肉棒……手に余る巨根を眺める。

それは雄としてあまりに立派であり、今や発情牝と化したエルザは見れば見るほど、触れれば触れるほど性欲が上がっていく気がする。

「はあ………はあ……っ♥ ど、どうだ？ 気持ちいいか……？」

（す、凄まじい勢力が、肌を通して伝わってくる……♥ 一度射精させただけで満足するのか……♥

も、もし……♥ こんなものを、挿れられたりすれば……♥）

見て取れる絶倫力に、思わず挿入時の威力を想像してしまう。もし犯されたなら、どれほどの快楽を与えられてしまうのだろうか。

有り得ないはずの挿入欲求。それを振り払うため、また少年を満足させるため、エルザは手ではなく胸も使う。

【え、パイズリ？ そこまでしてくれるの？ 想像以上にドスケベなんだね〜♪ パニースーツでパイズる気分はどう？】

「う、うるさい……♥ 黙って、気持ち良くなっていろ……♥」

射精させるために機嫌を取らなければならないが、屈して媚びるのも耐えられない。

そんな心境を吐き、拍手で応援する少年を睨みながら胸奉仕を続ける。

（お、大きすぎるだろう♥ 胸からハミ出ているじゃないか……♥ あ、熱さが♥ 胸全体から、伝わって……♥

これでは、余計に興奮してしまう♥ な、なんとしてでも射精させなければ……♥）

胸全体で肉棒の熱を感じ、ある意味、より効率的に発奮していくエルザ。息を荒げながら、顔ほどもある爆乳で肉茎を激しく摩擦し続ける。

「ふっ♥ くふっ♥ ふう……っ♥ ふ——っ♥」

（早く♥ 出せ♥ 射精しろっ♥ ど、どうせ……このチンポのことだ♥ 熱くて♥ 濃ゆいのが♥ 万が一にも中出しされれば受精確実の精液が♥

大量に詰まっているんだろう♥ は、早く……♥ 出し尽くせえっ♥）

献身的で熱の込められたパイズリ。それが効いたか、少年の巨根が一ツ脈打った。

【よし、そろそろ出るよ。スパートかけて…… 一気に出すから！】

「そ、そうか♥ さあ、遠慮なく出せっ♥」

やっと射精してもらえる——苦勞の果ての成果に、エルザは歎喜の笑みすら浮かべ、少年の射精を促した。

「お、大きくなって……♥ くるうっ♥♥」

ドブ♥♥ ビュルルルルルッ♥♥

「おほおおおっ♥♥♥ あ♥♥♥ 熱いのがっ♥♥♥ 出てるうううっ♥♥♥」

谷間にぶちまけられる熱い白濁。その感触は擬似的な膣内射精そのものであり……肌で受ける放精の感覚に、エルザは遂に絶頂。快感のあまりか、今まで上げたこともない奇声じみた啼き声で叫んでしまった。

「あ……♥♥ はへええ……♥♥」

【ふー、気持ち良かった。エルザさんもパイ射でイッチやった？ 物凄いアへ顔アへ声だけど】

「だ……黙れ……♥♥ 誰が♥♥ イッてなどおお……♥♥」

(イ……イッてしまった……♥♥ イカされた……♥♥ こんなことが……♥♥ 胸だけでイッたことなど♥♥ 今まで、一度も……♥♥)

感覚が悪いわけではないが、胸だけでの絶頂は初体験であるエルザ。少年の言うアへ顔アへ声も初めてであり、これも術式の効果なのだろうか。責めているはずが達してしまう。無様な姿を見せてしまったが、これで少年は満足したはずだ。そんなエルザの安堵を、全く衰えない少年の肉幹が否定する。

「なっ……？ お前……今、こんなに……」

【一回出しただけで満足するわけじゃないじゃん。で、まだマッサージしてくれるんだよね？ 言ってる意味わかる？】

暗に性交を求めているのは明らかだ。少年は快感と疲労でへたり込むエルザに迫り寄っており、今なら力尽くでも犯されてしまうかもしれない。

(ま、まずい……♥ セックス、だけは……♥)

逃げようにも逃げられない。

経験のない絶倫に犯される恐怖と期待が腫れ上がる中、少年がはいよエルザの両足を強引に開く。

パニースーツをズラして露出させた秘裂は既に濡れそぼっており、触れずとも開いた牝孔に肉幹が宛がわれる。

「ひっ♥ ま、待て♥ 待てっ♥ それだけは♥ 手や胸でならいくらでもする♥ だからっ♥」

【大丈夫だって。もしかして妊娠が怖いの？ ゴムつけてるから安心してよ】

「何を言って……！ 何も付けていないだろうっ！」

ゴムを付ける、と言う少年だが、未使用……生であることは見ればわかる。だからこそ、いくら性感性欲が上がろうと恐怖と嫌悪が勝っているのだが……

【だからー】

——パンッ！

【ちゃんとゴムしてるって。後でメリヤリにナマハメされるより、今ゴム有りでヤッてた方が安心じゃない？】

「っ？！ ……………ああ、すまない、ちゃんと付けているのか。しかし……それは、そう……だが……いや……」

少年に改めて言われ、やっとゴムを付けていることに気付く。だが、それでも妊娠の危険性、犯されることへの嫌悪が消えるはずはないのだが、

(……確かに、今の内に精力を消耗させておけば……後でナマハメされるよりは……安心、だが……)

少年に言われれば、その通りのように思えてしまう。呆けている内にも少年がのしかかり、陰唇に体重がかかけられ——

【はい、合意っ♪】

「ま、待て♥ 合意したわけでは……」

ずぼおっ♥

「ほおおおおおおおおおっ♥♥」

体験版はここまでです。続きは製品版で！